

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：17104

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23044

研究課題名（和文）談話効果の構成的分析

研究課題名（英文）Compositional analysis of discourse effects

研究代表者

平山 仁美（Hirayama, Hitomi）

九州工業大学・教養教育院・講師

研究者番号：40848602

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本語の不変化詞・文型・イントネーションが複合的に談話にもたらす影響について体系的な説明を与え、結果を他の言語がもたらす談話効果と比較することによって、各言語で共通して表すことの出来る文脈情報と言語間の差を説明するパラメタを解明していくことであった。研究期間中には、日本語の疑問文における不変化詞の使用とその語用論的效果、感嘆文が談話にもたらす効果とそれに伴う不変化詞との相互作用、さらに上昇イントネーションを伴う一部の文末助詞を含んだ平叙文の効果それぞれ分析し理論の提案を行った。また、このような談話効果について日英語の比較検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本語が伝達する談話効果を細分化したのちに分析し、全体の効果を構成的に分析することを試みたところに意義がある。日本語の特徴として、談話効果をもたらす方法（不変化詞・文型など）が多く備わっていること、そしてそれらを組み合わせることが可能なことが挙げられる。このような特徴を持つ日本語の談話効果を分析することで、英語などで観察されてきた談話効果がより細かな談話効果の組み合わせであることが理解できる。さらに、過去の研究で「疑問文」として扱われてきた一部の文を平叙文として捉え直すことが必要と論じ異なる分析の必要性を示唆した。

研究成果の概要（英文）：This project aimed to provide an account of the discourse effects of particles, sentence types, and intonation in Japanese. Another objective was to establish parameters that contributed to explaining the commonalities and differences of discourse effects cross-linguistically. This project gave analyses to interrogative sentences with particles and their pragmatic effects, the discourse effects of exclamative sentences and their interaction with particles, and the discourse effects of declarative sentences with a rising intonation (rising declaratives) in Japanese. Furthermore, these effects observed in Japanese were compared with those in English, and potential sources of variation were explored.

研究分野：言語学

キーワード：談話効果 不変化詞 文型 イントネーション

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

自然言語では、同一の目的を達成するために異なる言語表現が使われることがある。英語での例をあげれば、"Is it raining?" と "It's raining, isn't it?" という2つの発話は同一の目的の下に行われている。つまり、雨が降っているかどうかという事実を知るという目的を共有している。しかし、この2つの発話は使用場面で異なる。具体的には、こうした異なる種類の疑問文はそれぞれ異なる文脈情報を伝達するため、違った場面・状況で使われることが知られている (Farkas and Roelofsen 2017)。これに加え、先行研究では、文に対して与えられるイントネーションや、異なる文型(平叙文・疑問文・命令文など)を使い分けることも、直近の文脈について情報を与える重要な役割を果たしていることが示唆されている。

日本語は英語と異なり、助詞などの不変化詞を加えることで多様な文を作ることを可能としている。さらに、これら助詞などの不変化詞が多様であり、かつ複数の不変化詞を一度に使うことが出来るという特性を持ち、イントネーションの付加や特定の文型の使用を組み合わせることが可能である。以上のことから、日本語の談話効果への理解をより深めることを本研究で目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、まず不変化詞・イントネーション・文型の諸要素について個々の持つ文脈への効果を明らかにしたのちに、これらの相互作用について体系的な説明を与えることである。具体的には、話者の心的態度・聞き手への期待・文脈で話題となっていることなどの表出がこれらの個々の要素とどのように結びつくのかを明らかにしていくのが第一の目的である。さらに、これらが組み合わせられたときに全体の効果がそれぞれの効果から説明できるのかを考察し、他の諸言語との談話効果と比較し分析を深めることも本研究の目的の重要な一部分である。

3. 研究の方法

本研究では、まず談話効果に影響を及ぼす要素(不変化詞・文型・イントネーション)を特定したのちに、英語で近い文とそれぞれが使用可能な文脈を比較することで各要素が文脈のどこに影響しているのかを調査していった。その後、各要素を合わせた談話効果を構成的に導出することができるか、考察を試みた。

4. 研究成果

本研究期間中に、対比の「八」の談話効果と否定の島に与える影響、日本語の2種類の感嘆文がもたらす談話効果、疑問文を導出しない上昇イントネーション、という3点について、それぞれ考察や分析を行い、その成果を学会で発表し学会紀要論文の形で出版した。各部分について以下に説明する。

(1)対比の「八」のもつ談話効果と否定の島に与える影響

程度を示す疑問詞と否定がともに現れた場合、疑問文の容認度が落ちることは通言語的に知られている。こうした否定を含む文は「否定の島(Negative island)」を含むとされ、統語・意味・語用のそれぞれから説明が試みられてきた。日本語にも否定の島は存在するが(「太郎はどれだけ長くドイツに滞在しなかったの?」は疑問文として容認できない)、Schwarz and Shimoyama (2010)は疑問詞に「八」をつけると容認度が改善される(「太郎はどれだけ長くはドイツに滞在しなかったの?」)と報告している。ここで、Schwarz and Shimoyama は、「八」が「少なくとも」のような、「ある程度以上」の意味をもたらすことで疑問文が答えを与えられるようになると分析している。

しかしながら、上で述べたように否定の島は様々な言語で観察されており(“How long did Taro not stay in Germany?”も容認できない)、もし「ある程度以上」という語を付け加えることが否定の島を含む文の容認度の改善に関与しているのであれば、英語では *at least* のような表現を付け加えれば同様に容認度は改善されるはずである。しかしながら、そのような結果は得られない。また、過去に行った実験から日本語のいわゆる対比の「八」と「少なくとも」は使われ方や解釈のされ方が異なることがわかっている。したがって、本研究では「八」は意味的には真理条件に影響を与えず、語用論的に特定の談話構造を投射することで聞き手に特定の答え方をするよう誘導しているために、否定の島を含む疑問文の容認度を改善することができるかと提案した。これにより、否定の島への影響が日本語の「八」に見られる特有の現象であることも合わせて説明が可能である。

(2)日本語の2種類の感嘆文がもたらす談話効果

感嘆文は平叙文と異なる統語・意味的特質を持っている。また、感嘆文の文型の種類によって意味論語用論的特徴も異なってくるのが英語の感嘆文について主張されている (Rett, 2011)。日本語については、「太郎はなんて美味しいケーキを作るのだろう!」というような文が典型的な感嘆文とされ、その統語的性質が Ono (2006)によって明らかにされている。本研究では、いわゆる典型的な「なんて」が形容詞など程度を示す語に前置されて使われる感嘆文と、「なんて」

が文末に使われる文(「太郎が美味しいケーキを作るなんて!」)を比較して分析を試みた。

具体的には、「なんて」が程度を表す語に対して前置されている場合は文型としても平叙文と異なる感嘆文として扱われ、結果として平叙文と異なる談話効果が存在することを主張した。特筆すべき談話効果の違いとして、平叙文の談話効果の一部には会話の参加者の共有知識(Common ground)を更新する役割があるのに対し、感嘆文にはその役割がない事が挙げられる。つまり、感嘆文を発話することは自らの驚きを示すことが主な目的であると考えられる。一方、「なんて」が文末に来ている場合、文全体が与える談話効果としては平叙文とほぼ同等である。つまり、驚いたということを示しつつも、驚いた対象の命題の内容を聞き手に共有することが談話効果の一部となっている。これらの差はそれぞれに対して「いや」で命題内容を否定できるかが異なること、そして他の不変化詞との共起可能性もそれぞれで異なることから支持できる。

(3)疑問文を導出しない上昇イントネーション

日本語は上昇イントネーションを付与することによって疑問文を作り出す意味的操作を行うことができる言語である。また、上昇イントネーションは統語的操作と疑問文の導出が結びついた言語でも疑問文と共に現れることも多い。近年英語では、語順としては平叙文ではあるものの、上昇イントネーションを伴う文を Rising Declarative と呼びその意味論的語用論の特徴が議論されてきた(Farkas and Roelofsen, 2017; Jeong 2018)。日本語のような疑問文を生成するのに統語操作を伴わない言語にも Rising Declarative と呼べるものが存在するのか、存在するとすればどのような特徴を持つのかを本研究では考察した。

日本語では疑問文でも認可される弱い否定極性表現(「そんなに」など)との共起可能性を検討すると、文末助詞として「よ」「ね」が使われている場合、そして強勢をもたない否定疑問文に使われる「ない」がある場合は、上昇イントネーションは疑問文を形作っているとはいえないことがわかる。前に上げた2つの文末助詞については、先行研究でも上昇イントネーションが付加されたものも一般的な疑問文としては扱われていなかったが、ここで提案されている分析では、上昇イントネーションに特別な意味を付与することで疑問文として扱うことができないことを説明している。しかしながら、本研究では、上昇イントネーションが複数の環境で疑問文を生成する以外の機能を持っていること、上昇イントネーションの質は疑問文と上に挙げた環境で変わらないことから、すべての環境を統一して扱うことのできる上昇イントネーションの効果を提案した。具体的には Rudin (2017)の考え方に沿い、イントネーションは話し手のコミットメントに働くという分析を採用した。それに加え、日本語という複数の要素で談話効果を表す言語では、このイントネーションの効果と文末助詞のもたらす談話効果との相互作用により、先行研究で言及されているような文脈による上昇・下降イントネーションの使い分けが行われるという提案をした。最後に、本研究の結果により、今まで「疑問文」として扱われていた文についても再考の必要性があることを示唆した。

<引用文献>

- Farkas, D. F. and F. Roelofsen (2017). Division of labor in the interpretation of declaratives and interrogatives *Journal of Semantics* 34(2), 237-289.
- Jeong, S. (2018). Intonation and sentence type conventions: Two types of rising declaratives. *Journal of Semantics* 35(2), 305-356.
- Rett, J. (2011). Exclamatives, degrees and speech acts. *Linguistics and Philosophy* 34, 411-442.
- Rudin, D. (2017, January). Intonation and commitment: The case of rising declaratives. UCSC-Stanford Workshop on Sentence Types.
- Schwarz, B. and J. Shimoyama (2010). Negative Islands and Obviation by Wa in Japanese Degree Questions. Proceedings of SALT 20, 1-18.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Hitomi Hirayama	4. 巻 29
2. 論文標題 Rising Declaratives in Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 197 ~ 208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hirayama Hitomi	4. 巻 6
2. 論文標題 Exclamations and their discourse effects in Japanese	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of the Linguistic Society of America	6. 最初と最後の頁 411 ~ 411
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3765/plsa.v6i1.4948	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hitomi Hirayama	4. 巻 27
2. 論文標題 A Pragmatic Account of Negative Island Obviation by wa in Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 367 ~ 380
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Hitomi Hirayama
2. 発表標題 Rising Declaratives in Japanese
3. 学会等名 The 29th Japanese/Korean Linguistics Conference（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hitomi Hirayama
2. 発表標題 Exclamations and their discourse effects in Japanese
3. 学会等名 The 95th Annual Meeting of the Linguistic Society of America (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hitomi Hirayama
2. 発表標題 Non-exhaustivity on QuDs: Contrastive wa in Japanese
3. 学会等名 Workshop “QuDs and exhaustivity: experiments, computation, and theory” (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hitomi Hirayama
2. 発表標題 A Continuation-based Analysis of Contrastive Wa in Japanese
3. 学会等名 The 33rd Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hitomi Hirayama
2. 発表標題 A Pragmatic Account of Negative Island Obviation by wa in Japanese
3. 学会等名 The 27th Japanese/Korean Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------